

タコクラゲが港の岸壁へ衝突

Shin KUBOTA : *Mastigias papua* striked on a quay wall at a harbour

久保田 信

和歌山県西牟婁郡に所在する田辺湾やその付近の様々な漁港には、毎年のように夏季に南方系のタコクラゲ *Mastigias papua* が出現する(久保田, 2007)。今回、白浜町袋漁港でよく成長した何百個体(大半が直径10cmを超過、最小は約4cmで、体の全体が白色の個体は不在)が海表面直下を群泳している機会を二度とらえた。どちらの場合もさざ波が立たっておらず、無風状態であった(図1)。

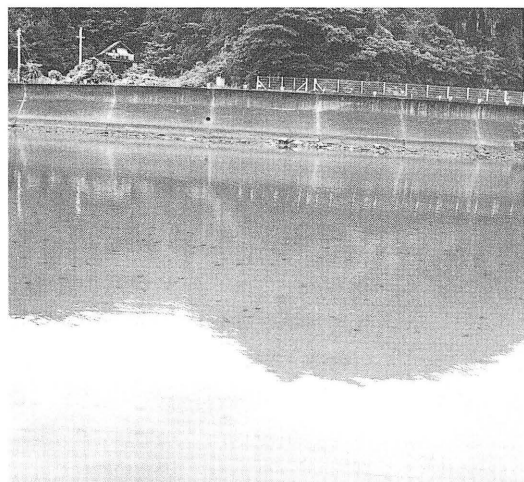


図1 白浜町袋漁港に夏季に大量出現した
タコクラゲ(2012年9月2日正午前)

夕方(2012年9月1日晴天の日の入り直前で満潮近く)と昼間(2012年9月2日正午前の曇天でやや干潮)に1回ずつ30分間目視で調査し、区間を港の中央部の漁船が係留されていない約10mの長さとした(図2)。この区間でそのあたりに群泳する少なくとも200個体もの多数のタコクラゲ(図1)が岸壁へどれほど衝突するのかがカウントした。

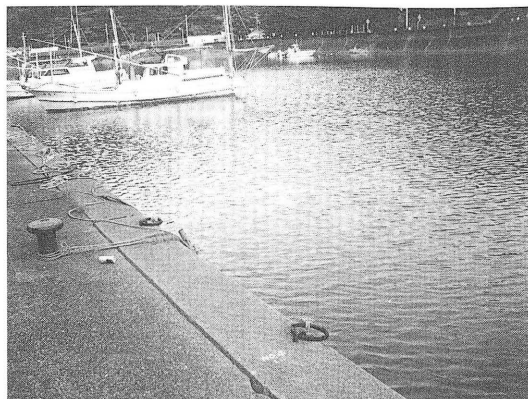


図2 白浜町袋漁港の中央部の岸壁の調査区域
(2012年9月初旬)

結果は、たとえ岸壁に1m以内に接近してもその手前でうまく回転して衝突を回避した(82回中58回: 71%)。特に昼間は夕方に比べて岸壁に近寄ってくる個体が著しく少なく、岸壁近くで回避する必要が生じておらず、昼間の衝突回数はたった1回だけだった(表1)。ところが、夕方には岸壁のより近くまでタコクラゲが接近することが多かった。そこで、岸壁までの接近距離を夕方は50cm(昼間は1m)として、接近数と衝突数をカウントした。よって両者の岸壁への接近回数は実際はもっと大きな差がある。岸壁により接近することが多かった夕方の方が、昼間よりもその衝突頻度が著しく高かった。すなわち、夕方の30分間で75回の接近があり、そのうちの31%で衝突がみられた。一方、昼間の30分間では接近距離を倍にしてもわずか7回だけの接近で、14%の衝突率であり、これは夕方の約半分の数値であった(表1)。

衝突に至るまでのタコクラゲの遊泳速度は様

々で、衝突した個体のサイズも（傘の直径が約4 cm の個体以上が衝突）、それらの棒状付属器の数（8本が数本にまで減少している個体あり）も色々であった。衝突は傘の上部からのことが大半だったが、体のどこにも傷を負うようなことはなかった。なお、同一個体が何度も繰り返し当たっているかどうかの判定は困難だった。

表 1 タコクラゲの和歌山県白浜町袋漁港の岸壁（約10mの長さの区間）への衝突（2012年9月初旬）

時間帯	タコクラゲから 岸壁までの 垂直距離	接近総数 (内、衝突回数)
17:50－18:20	1 m	75 (23)
10:36－11:06	50 cm	7 (1)

引用文献

久保田 信. 2007：2007年夏季に和歌山県白浜町瀬戸漁港で多数のタコクラゲ（鉢虫綱，根コクラゲ目）が出現. くろしお, (26), 21-23.

京都大学フィールド科学教育研究センター
瀬戸臨海実験所
(〒649-2211 西牟婁郡白浜町459)
Seto Marine Biological Laboratory, Field
Science Education and Research Center,
Kyoto University, Shirahama-cho 459,
Nishimuro, Wakayama 649-2211, Japan.)
e-mail : kubota.shin.5e@kyoto-u.ac.jp